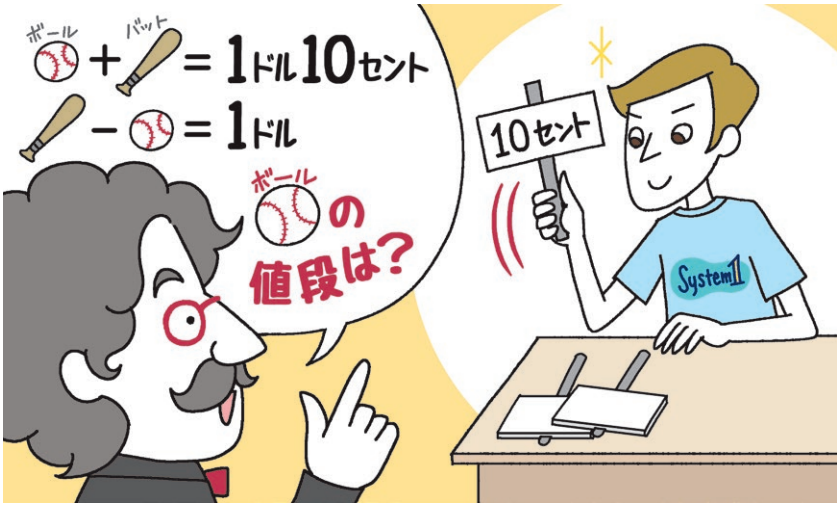
【Keyword】

# 速い思考と遅い思考

## 「速い思考」は直感、「遅い思考」は論理を司る




直感的に答えると多くの人が間違う「バットとボール」問題。ボールが10セントなら、それより1ドル高いバットは1ドル10セントとなり、合計1ドル20セントになってしまう。間違いの背景にあるのは、思考のショートカットを生み出す「システム1＝速い思考」だ。

### 「速い思考」のみの判断がバイアスや錯覚につながる

突然だが、次の問題に直感的に答えてほしい。

**Q バットとボールは合わせて1ドル10セントです。バットはボールより1ドル高いです。では、ボールはいくらでしょう？**

パッと頭にひらめいた数字は何だろうか。「10セント！」と答えた人は、残念ながら不正解（正解は5セント）。簡単なのに間違えやすい、この「バットとボール」問題。米国の大学生数千人の調査では、ハーバード大学やプリンストン大学、マサチューセッツ工科大学など、名だたる有名大学の学生の50％以上が「10セント」と直感的に答えてしまったという。

このような「エラー」が起こってしまうのは、人間の脳に「処理速度の異なる2種類の思考パターン」が存在するからだ。ノーベル経済学賞を受賞した米プリンストン大学名誉教授のダニエル・カーネマンは著書『ファスト＆スロー　あなたの意思はどのように決まるか？』（早川書房）のなかで、私たちの思考プロセスには「速い思考」であるシステム1と「遅い思考」であるシステム2の2つが関わっていると説明する。眉間にしわを寄せた女性の写真を見て「彼女は怒っている」と判断を下すのは、直感的な「速い思考」であり、「17×24」を紙と鉛筆で筆算するときに使うのは、熟慮・熟考を司る「遅い思考」。この連載で取り上げてきた数々の認知バイアスや錯覚は、“自動モード”で行われている「速い思考」がもたらすものなのだ。

投資の意思決定における「判断ミス」の原因の多くも、この「速い思考」が背景にある。「大企業だから安心」などイメージ先行の投資や、「有名投資ブロガーの○○さんのおすすめ銘柄だから」「今買わないと乗り遅れる」といった心理まで、直感的な判断はすべて「速い思考」によるものと考えていい。一方、不足しがちなのが、「データを精査する」「マイナスの情報もチェックする」「複数の専門家の意見も聞いてみる」など、努力や集中力が必要とされる「遅い思考」。投資判断では、「速い思考」による判断を鵜呑みにすることなく、「遅い思考」を使って熟慮することが、意思決定の質の向上につながることを心得たい。 M

**賢者の投資術**

× 「ビビッと来た自分の直感を信じて投資！」

○ 「ビビッと来たからもう一度情報を精査してみよう」

参考文献：『ファスト＆スロー　あなたの意思はどのように決まるか？（上・下）』（ダニエル・カーネマン著／早川書房）ほか